

② 東京都市大学塩尻高等学校



昭和33(1958)年から慶太は信州電波専門学校の経営に関わりました。
 ふるさとの長野県に工業を軸に将来の日本を担う人材を育成するための学校を作りたいという思いから、自らが経営する武蔵工業大学付属目黒高等無線学校の信州分校とし、支援体制を強化しました。
 その後、慶太の尽力もあり、昭和36(1961)年には長野県私学初の工業高校である武蔵工業大学付属信州工業高等学校(現 東京都市大学塩尻高等学校)が創立されました。
 校内には慶太の胸像があり、「五島慶太翁夙に育英に志あり」と記されています。

表紙裏マップ



交通のご案内

- 長野自動車道・麻績I.C.より……………車約30分・18キロ
- 上信越自動車道・上田菅平I.C.より……………車約30分・17キロ
- 北陸長野新幹線・東京駅～上田駅……………1時間20分
- JR上田駅より青木行きバス……………約30分・12キロ

お問い合わせ先

五島慶太未来創造館
 〒386-1601
 長野県小県郡青木村大字田沢3270番地3
 TEL・FAX 0268-49-0303

信州・青木村の先人



誇らしき わが郷土
 五島慶太の軌跡を辿る

五島慶太

ゆかりの地マップ

青木村の先人、五島(小林)慶太は、東急グループの礎を築いた実業家であるとともに、教育者として次世代の育成に力を注いだ人でもありました。

また、若くして故郷を離れ多岐に渡って活躍する一方、生涯を通じて「ふるさと・信州」との関わりを持ち続けてきた人でもあります。五島慶太のふるさとである青木村でその軌跡を辿ってみましょう。

青木村



焼失前の生家

生家を復元した東急グループ慶太塾

五島慶太の生家

① 生家跡地

お蚕さまと暮らした家

慶太が20歳まで過ごしていた家は殿戸集落の一番上の高台にありました。当時、上田地域では蚕を飼い絹糸の原料となる繭を作る養蚕業が盛んでした。農家の人々は蚕を「お蚕さま」と呼び、家の中で大切に育てました。夜は蚕が桑の葉をかじる音を聞きながら寝ていたそうです。平成30年に焼失するまで、大切に管理されていました。現在は石垣が当時の姿を伝えています。



平成26年「生家の実測・復元模型制作研究プロジェクト」

平成26年(2014)8月、東京都市大学工学部建築学科勝又研究室(代表:勝又英明教授)によって行われたこのプロジェクトで、生家の実測・調査・研究が行われました。

5か月にわたる調査の結果、実測図、時代ごとの図面、慶太が住んでいた当時の推測復元図と50分の1スケールの模型を製作しました。詳しい内容は報告書にまとめられています。



調査の様子

平成30年8月14日 命日に焼失した生家

平成30年(2018)8月14日午後、青木村は激しい局地的雷雨に見舞われました。そのときに発生した落雷が原因で、殿戸区の五島慶太生家から火災が発生し、建物が全焼します。奇しくも、五島慶太の60回忌の命日にあたる日でした。現在は東急グループの研修施設「東急グループ慶太塾」として活用されています。(見学は事前予約が必要です。)



火災直後の生家

よみがえる五島慶太生家

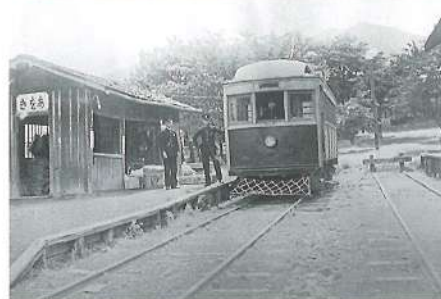
建物は残念ながら焼失してしまいましたが、平成26年の調査結果と写真を活用することで、かつての生家のイメージを再現することができました。

五島慶太未来創造館の外観は生家をモチーフにしています。また内部はVR(バーチャリアリティ)映像で復元され、慶太が過ごした部屋の様子も体感することができます。



生家復元模型

19 上田温泉電軌青木線 青木駅跡(現 青木バスターミナル)



かつての青木駅(村所蔵)

上田市から青木村へ向かう国道143号上にはかつて路面電車—上田温泉電軌青木線—が走っていて、現在の青木バスターミナルに終点の青木駅がありました。この鉄道の設立に慶太は大きく関わりました。

地域の大きな期待の下に鉄道の敷設(ふせつ)運動が起き、大正9年1月に上田温泉軌道を設立、同年11月に上田温泉電軌に社名を改めます。

鉄道院総務課で企業の鉄道設置を指導・監督する仕事を担当していた慶太は、技師の派遣や企業計画にあたり「実に熱意ある指導」を尽くしました。

上田温泉電軌青木線



小島大治郎の碑

当時県道であった第二線路(現在の国道143号線)の上に線路が敷かれ、大正10(1921)年6月に三好町—青木間(青木線)、三好町—別所間(川西線(現在の別所線))が開通。大正13(1924)年8月に千曲川橋梁が完成して、上田駅まで乗り入れが実現しました。

その後、青木線は昭和13(1938)年7月(村誌より)に廃線に至り、17年間の活動を終えました。

この上田温泉電軌の設立者は小島大治郎で、上田城跡公園には、慶太が建てた小島大治郎を顕彰する碑が今も残っています。



上田市乃其附近名所圖繪

20 北陸新幹線 JR 飯山線 飯山駅・五島慶太翁の碑

表紙裏マップ

飯山市内のJR飯山駅前には慶太を称える石碑があります。慶太は長野市—新潟県十日町市を結ぶJR飯山線の前身となる飯山鉄道の設立やその後の国鉄飯山線への移管に大きく関わりました。

大正6(1917)年豊野(とよの)—飯山間の鉄道敷設が認可され、飯山鉄道が設立されますが、当時鉄道員監督局の慶太から「格段の援助」を得たといわれています。

大正10(1921)年10月に豊野—飯山間が開通、昭和4(1929)年9月に新潟県十日町まで全通しますが、後に経営難となり、昭和19(1924)年6月に国策で政府に買収・国有化されることで、廃線の危機を逃れます。この時の運輸通信大臣が五島慶太でした。



五島慶太翁の碑



飯山線と千曲川(信州いいやま観光局提供)



飯山鉄道沿線案内

JR 飯山線 飯山駅

2 青木村立青木小学校 (青木尋常小学校)

明治22年(1889年)入学
明治33年(1900年)代用教員を勤める
慶太が4年間、自宅から約3kmを歩いた小学校です。青木村の中心部に位置し、学校の敷地内には慶太の息節である若林若次郎先生の顕彰碑があり、石碑の文字は慶太自身の筆で書かれたものです。若林若次郎先生は担任の先生で、やんちゃな慶太を辛抱強く育てたと伝えられています。また、青木中学校の付近には、同じく息節である小林直次郎先生の顕彰碑が建立されています。小学校を卒業した7年後、18歳の慶太は上級学校(現在の大学)への進学を断り、青木村尋常小学校で代用教員となりました。その際に紹介してくれたのが小林先生です。慶太は同先生に「我が師の徳」を忘れませんでした。



【エピソード】——
小学生の慶太は元気がよく、器用なものを造ることはありませんでした。高い木の木に登ったり、庭に遊ぶのが大好きで、大人たちを心配させることも多くありました。そんな時、若林若次郎先生は、お友達に分けなご、まっごの良、お分れのとごがなごまで。また、負けず嫌いであり、友人と相撲をとったり、目撃者も大きく力のある者から投げられそうにもなりましたが、力がついてしまえば、ついに大きな相手も打ち負かすことができました。



3 上田市立浦里小学校 (浦里小学校高等科)



明治26年(1893年)入学
慶太が2年間通った小学校です。尋常小学校は4年制であり、卒業すると義務教育が終了しますが、もっと勉強がしたい。進学し、その上の小学校高等科に進学しました。当時の青木村には高等科がなかったため、慶太は隣の浦里小学校高等科に進学しました。

【エピソード】——
慶太は先生の説明で疑問が湧いてくる、あれこれ質問をしました。その質問は先生を困らせることも多く、同級生はいつも心もたたり、冷や冷やしたりしました。また、慶太は学校で勉強するだけでなく、村の歴史にも興味を持ち、親守の百舌神社のことや通神神のこと、地名の由来や行事の成り立ちなどについて村の古に聞いて回るようになりました。

4 長野県上田高等学校 (長野県尋常中学校上田支校)



明治28年(1895年)入学
慶太が3年間通った中学校(現 上田高校)です。上田市の中心部に位置し、江戸期の上田城の三の丸を主屋跡跡に校舎を構えています。校門である「古城の門」は館の表門跡が、寛政2年(1790年)に再建されたものであり、上田市文化財の指定を受けています。

【エピソード】——
当時、中学校に通う者は少なかったが、慶太は進学を強く望みました。しかし、父若右衛門は反対、慶太の熱意を聞き取った母寿美が、強硬にもついに父若右衛門を説得した結果、なんと科学奨励金を取れました。父寿美の思いを察した若右衛門は、慶太は肩に1枚しかない中学校の支校に入学を命じ、入学後は家からは徒歩3里(約12km)も離れている校舎までの道を毎日2時間かけて通い、勉強に励みます。大変な苦学ですが、人に負けるといけないという気、辛い道中から持ち入ってきたお菓子を食べて、この三里の道のりも大した苦学でもありません。ただの一日も学校を休んだということはありませんでした。

6 長野県松本深志高等学校 (長野県立松本中学校)



明治31年(1898年)入学
慶太が2年間通った中学校(現 松本深志高校)です。松本市内に位置し、独特のスクラッチタイルを使った校舎は、昭和10年の落成当時の面をそのまま残しており、管理普通教室棟と講堂の2棟が国の登録有形文化財に指定されています。

【エピソード】——
上田支校での3年間の修了した慶太は、当時本校であった松本中学校へ進学しました。家から歩いて通える距離ではなかったため、松本に下宿しました。下宿中は昼夜生活であったため、下宿仲間とよくつきあきを作り、雨をつらなごらぐに語り合っていたそうです。実家を離れての下宿生活と交友は、慶太を人間的に成長させることになりました。

6 日吉神社



日吉神社は青木村戸戸に位置し、古くは山王大権現宮とよばれ、大山作命を祀っています。平安時代からこの地域は清野庄と呼ばれ、比叡山麓にある名古言大社の社領だった地帯でこの地に建てられたといわれています。建立は室町時代で、「五間辻流れ廻り」というこの本殿の建築様式は、規模の大きさでは黒下川に類を見ないものです。平成3年に長野県県民に指定されました。



父・小林右衛門、母・寿美

【エピソード】——
慶太の母親は、信心深く、父の若右衛門は神田日下かきお経を唱えたいとそうです。また、母の寿美は男が長く働いて、ついに雇い入れてもらいました。後に東京に出た慶太から手紙が来ると、父寿美は決してそれを見せたくありません。日吉神社の社殿に上げ、慶太の親類と世・禁裏見災を祈って、神に感謝してから封を切っていました。

7 殿戸区公民館・五島慶太胸像



青木村戸戸に位置する殿戸区公民館の敷地内には慶太の胸像があります。慶太は亡くなる前年の昭和33(1958)年、故郷の殿戸区に公民館を寄付しました。その際に慶太から寄贈されたものの中には「和を以て貴しと為す」の筆跡の書や、ふるさとのこと歌った演習等もあり、現在は五島慶太未来創造館で展示されています。慶太が高齢した公民館は建て替えられましたが、慶太の胸像は今も殿戸区を見守っています。

11 国宝 大法寺三重塔



建立は鎌倉時代末期の正徳2年(1333年)。初重を大きくした造りは、他に奈良の興福寺三重塔だけとまわって珍しく、安定感があがり開きで落ちた雲間が山里にだけあつた美しい姿です。その美しい姿は、庶民が何回も振り返って見たいと、呼ばれ、広く人々に親しまれています。

12 青木村郷土美術館



国宝大法寺三重塔の近くにあり、郷土にゆかりのある画家達の作品、著名人の作品などを展示し、気軽に立ち寄れる美術館です。国宝大法寺三重塔の壁面復元模写図、収蔵品の常設展示、企画展など、静けさの中で美術に浸ることができます。別館の喫茶室では、コーヒー・抹茶・青木村産のりんごを使ったジュースや、長門牧場のアイスクリームを味わうことができます。

13 信州昆虫資料館



チョウやクワガタムシなどの多数の標本を展示しています。一階には昆虫に関する本が約1,000冊所蔵されている図書室を備え、二階には全国に生息するチョウのほぼ全種約250種類の標本が展示されています。タマムシ・カミキリムシ・シロムシの仲間やハチの標本も展示しており、体の形や模様を観ることができます。

14 沓掛温泉



開湯は平安時代といわれ、近くには天然記念物に指定された野生のサトイモが生ずる石平公園があります。弘法大師にサトイモを分けてほしいといわれた老婆がこれは石と断る、あとで食べようとしたとる本道の石のようになつていってと伝えられる石平伝説が残っています。薬師堂から続く遊歩道には夜桜小屋や座敷があります。また、外湯・小倉湯もありです。

15 道の駅あおき



農産物直売所や食堂施設、味処こまゆみ、情報休憩施設ふらっと家(ホーム)あおきがあります。催物などの文化・観光情報を発信しています。

17 青木村歴史文化資料館



江戸時代から明治にかけて発展した百姓一揆の歴史を伝える「義民資料館」と、村が生んだ反骨の俳人・栗林一石の生きざまを貴重な資料で振り返る「栗林一石路資料館」からなる資料館です。構内へ平安時代までの土器や石鏡なども展示しています。

18 青木村民俗資料館



「昭和の時代」をテーマに、ちょっと前の青木村の生活や文化を体感することができる資料館です。農具、民具、資料物、おもちゃなど、昭和のくらしを彩った様々な道具を通して「あの頃」に思いを馳せてみてください。



8 ますや旅館



東京高等師範学校(現筑波大学)へ入学した慶太ですが、夏休みには必ず実家へ帰省しました。その際には青木村内の田沢温泉「ますや旅館」に、学生仲間と連れ立って泊り、勉強や議論、時には腹相撲などをして過ごしました。なお、ますや旅館は国の登録有形文化財に指定されています。

9 五島慶太翁記念公園



昭和56(1981年)8月に整備された公園内には、慶太の長男五島邦生氏により贈られた銅像が建立されました。緑豊かな公園内では、四季折々の美しい樹木や花の姿をみることが出来ます。五島慶太翁記念公園

10 五島慶太未来創造館



青木村で生まれ、実業家・教育家・文化人として活躍した五島慶太の功績を学ぶ施設です。村内にあった慶太の生家をモチーフとする建物の中は、生家内部を体験できるVR(バーチャルリアリティ)。慶太のカメラの品、電卓、車庫模型やジオラマなどの展示を通してその軌跡を振り返るとともに、慶太の想いを未来につなげていく空間となっています。

16 田沢温泉



開湯は飛鳥時代後半、まだ若き鳥嶋権も滞在し、「千曲川のスケッチ」で紹介されています。「字子の湯」としても有名。近くには子安地蔵尊がある薬師堂があり、四季を通じての参拝者があります。宿のほかに、共同浴場(外湯)として、有乳湯(うちゆ)があります。